

「2020 年代の建築をとらえる言葉」

建築の今（あるいは少し未来）をとらえる「言葉」を集めるコンペです。

数十年後、数百年後の人たちが振り返ることのできる言説を、時代の境目にある今を生きる時代の言葉として記録に残したいと日本建築設計学会では考えています。

2020 年代の建築を語る上で必要になるだろう新しい言葉、もしくは新しい意味を持つようになるだろう言葉を、その語義と合わせて提案してください。それら言葉を集めて、同時代を生きる我々の羅針盤となり、後世への記録ともなるようなキーワード集を編纂します。

提出物：

言葉と語義を、300 字程度の解説書にして提出してください。

追加テキスト（最大 200 字まで）や図版で補足いただいても構いません。

解説書では、言葉（英訳、読み仮名）と語義のほか、その言葉が 2020 年代の建築を語るうえで必要になるだろう理由を、2021 年現在観測できる「兆し」として説明してください。写真主体のビジュアルなプレゼンテーションでも小論文でも、様式は自由です。自身の建築作品や言論活動を元にした当事者視点でも、現代の建築状況を俯瞰した第三者的視点でも構いません。学生や建築以外の異分野の方からの応募も歓迎します。

小見山：選定会議がいま終わりました。全部で 54 の言葉が集まりました。このうちの 30 作品は、年齢や性別、地域バランスを考慮して我々が事前に直接お声がけして集めたものです。残りの 24 作品は日本建築設計学会ウェブサイトの応募フォームからご応募いただいたものです。言葉を投じてくださったみなさまに感謝したいと思います。全応募作を事前共有した上で、京都大学に選定委員 4 人が集まり、改めて応募作をひとつずつ読み合わせました。キーワード集に収録するものとして、全部で 44 作品を選定しました。語義が明快であることに加え、言葉としての新規性を十分に持っているもの、あるいは解説文において 2020 年代に必要な言葉であることが十分に説明されているものが選ばれました。2020 年代は始まったばかりですから、既に人口に膾炙している言葉ではなく、これからの 10 年間に必要かどうかという観点で選定しました。ここからは、キーワード集に収録されていないものも含め、投げられた 54 の言葉すべてを一望する見取り図を作成したいと思います。

川島：整理する軸が必要なのかな。

能作：軸を設定すると、整理された感じはしますね。ただ、2 軸しか取れないから予め決められた指標の度合いを示すことになってしまいますね。

岩元：最初から軸を設けるのは苦しいかも。まずは、応募者のみなさんが何に深く問題意識を持ったのかをあぶり出しませんか？例えば、集まった言葉で一番多いのは何だろう。

小見山：今回、同じ言葉の応募は一つとしてありませんでしたが、傾向はありそうですね。

能作：まずいくつかの島に分けてみましょう。

しばしの議論のあと、「生態系」「社会性」「風景」「物質・素材」「曖昧さ・柔らかさ」「内外の境界」「コロナ」「都市」「情報化と現実」「制作・継続」「人間と非人間」といったまとまりが見えてきた。

岩元：「都市」のまとまりにある〈非パブリック〉は、英題と同じ〈パブリベート〉にした方が意図が伝わりやすいかもしれませんね。

小見山：より良い表現がありそうな場合は、応募者の方に提案してみましょう。

岩元：〈ファストアーキテクチャ〉は「情報化」でもあるけど、「大衆性」への問題意識でもあるかな。近代批判という意味では〈後悔空地〉とも近そうです。

能作：ポストモダンの時代は意味や記号がキーワードとなりましたが、今回は見当たりませんね。〈象徴〉はありましたが。

岩元：説明文を読むと、記号というよりも人間らしさや人間とは何かという問題意識なので、文中にある「アイデンティティ」を補足してもよいかもしれませんね。

能作：そうですね。〈ユマニチュード〉とも近そうです。

小見山：「風景」のまとまりは「生態系」と合わせてはどうでしょうか？

岩元：むしろ「風景」は「都市」と近いんじゃないかな。都市といわずに、ランドスケープというもう少し大きな枠組みで見ているところに現代性があるのでは。〈ヒンターランドスケープ〉のように、都市と田舎の二項対立の先にあるものを興味の対象としている人もいますね。

川島：都市を都市と呼んでいる人は、コロナ禍の問題を語っている人が多いですね。人間中心主義や人間至上主義へのアンチテーゼを言っている人も多かったからそのまとまりもありますね。大きなまとまりの周りに他のまとまりを並べていくという整理の仕方もあるかもしれませんね。

能作：あまり明確な中心をつくりたくはないけど、「物質・素材」は大きなまとまりではありませんね。

岩元：同じ「物質」の島の中でも、〈カービング〉や〈フィールドワーク〉など物質そのもののお話をしている人と、〈統合芸術〉のような物質の捉え方とは問題意識が違う気がする。〈テクトニック〉も物質への眼差しの話だから、〈統合芸術〉と近いのかもしれない。それぞれのまとまりはわかるようになってきたので、次はまとまり同士の接点を考えたらどうかな？

小見山：風景から人間へ向かって、スケールの大きいものから小さいものへというグラデーションが見える気がします。

川島：制作における認識論としては、「空間」と「物質」が大きなまとまりとして見えますね。その上で、〈溶域〉や〈やわらかさ〉は、空間と物質とを行き来する言葉のような気がする。

能作：「制作・継続」も特徴的なまとまりですね。

小見山：応募くださった方は建築家が多いので、すべては「制作」につながっているとも言えるから、個別のまとまりの名前としては入れないほうがいいかも。

川島：制作を抜いて「継続」だけにしましょうか。まさに〈グラデュアリズム〉と言って良いのかもしれない。継続することに意味があるという方法論ですね。

岩元：まだそれぞれのまとまりを総称する名前はじっくりくるものが見つからないものもありますね。その場合はいま思いつくかぎりを列举しておきましょうか。重ね合わされた言葉から見えてくるものもあるでしょう。

小見山：集まった 54 の言葉から何らかの傾向を見て取ろうと、見えてきたまとまりそれぞれに名前をつけるとともに、まとまり同士の関連性や重なり合いを示す見取り図を作成しました。この場ではここまでとしましょう。2020 年代が実際に終わった時、また改めてこれらの言葉を振り返ってみたいですね。

2021 年 10 月 24 日 京都大学桂キャンパスにて 文責：小見山陽介

発行日：2021.12.18